

第9回 蘇東坡は最初の官僚暮らしの自己評価をした

——いちべつ別三年を費やす

2017年5月2日（火）。

「世間はゴールデンウィークらしいけど、ボくらみたいに、そんなの関係ないよ
おって人、かなり多いんじゃないのかなあ。ボくらは逆に今日が休みだし、だれ
かがどっかに遊びに行けば、そのどっかでは働いているだれかがいるはずだしね」
「遊びにきてくれる人がいるから仕事になるんで、ありがたいってことなのでは
ないでしょうか」

「そりゃあそうなんだよね。ボくらだって、1年365日、そこに利用者さんが

いてくれるから仕事が絶え間なしにあるんで、ありがたいと思わなくちゃね。今朝のニュースで、カツオのシーズンなのに獲れないから、鯨節工場が困っているっていうのをやってたけど、日本のカツオの漁獲量って年々減ってるんだってね。カツオって、叔父さんの好物だったよね」

「黒潮に乗って日本の方に来る前に、南方で先に獲られてしまうようですね。江戸時代には、鎌倉で水揚げされた初鯨が江戸に運ばれたらしいので、距離が何十倍だか何百倍だかに延びて、遠く南方で獲れた初鯨を食べるってことになるのでしょうか」

「鯨節工場と違って、高齢者はこれから年々増えるから、介護の仕事がなくなつて困るっていうことは絶対にならないだろうけど、逆に仕事をしようっていう人はあんましないんだよなあ」

「求人広告を出しても、ウチに人がきませんねえ」

「給料が安いんだから、しょうがないよお。ファミレスの高校生のバイトのほうがよかったりするんだもの」

「介護保険の制度によって、介護職の給与は低くしか払えないようになっていて、人の取り合いでは他業界に必ず負けてしまいます」

「先にカツオを獲られてしまうようなもんな。現場で働く人がいなければ、制度はあっても中身がからっぽってことになっちゃうだろうに」

「それが実は国の狙いかもしれませんよ。働き手がない、事業所が成り立たない、介護保険を使いたくても使えない、よって介護保険のために国が払うお金が減り、財政の健全化にすこぶる結構だと」

「国ってというのは、民衆のひとりひとりのことなんか考えちゃいないよね。国が

道徳教育に熱心なのは、自分の都合をぶうぶういわないで国家のために動く部品にするためだよ、きっと」

「国への奉仕を熱心に説く人は、自分は奉仕しなければならない一般市民ではなくて、奉仕させる側にいると思っただけでなく、自分だけでなく、自分の子も、子々孫々もそうだと、思っているのではないのでしょうか。実際に2世、3世の議員がごろごろしているわけですから」

「そのうち憲法から平等という言葉が消して、身分制社会にしようとするかもね。だいたい一般市民っていうのがもうすであやしくなってんじゃん。『共謀罪』で一般市民は対象外とかいってんけど、『あんたは一般市民じゃない』っていわれたらおしまだよ。ボクはフツーでないからいじめられたしね」

「こんな話をしているのが、国から見たら、すでに善良な一般市民ではないので

しようね」

「昨日は、豪華寝台列車四季島が初めて乗客を乗せて走ったんだってね。ニュースで見て、ああいうのってむかつかない？ それこそ身分制社会が近づいてるって感じにならない？ 上野から3泊4日で東北や北海道を回るんだけど、一番高いチケットはペアで190万円なんだってさ。ボクらの時給の約2000時間分だよ。1日8時間で250日分！ なんか笑っちゃうよなあ。その一方で、赤字路線は切り捨てで、カネのない下々の者は相手にしないってことだもの」

「いまはまだ昭和の余韻というか、一億平等社会のなごりみたいなのがあって、普通の人も四季島に乗れるみたいにして、明るいニュースであるかのように流していますけど、格差は明らかに拡大しつつありますよね」

「きっと、特権階級、国家に奉仕する純良な一般市民、共謀罪でブタ箱行きか無

残に切り捨てられる人々という、三つの階級にそのうち分かれるんだろうなあ」

「そこまでなりますかねえ」

「自分はもう年寄りで、そんなになる前に死んじゃうからいいって思ってたんじゃないの？ 叔父さんにガンバレとはいわないけどさ」

「テレビに向かってブウブウいうくらいしかできないですからねえ」

「トバー君っていうのは、難しい試験を突破して、明らかに特権階級入りした人だよ。これからどうなっていくのか、腐敗して墮落するのか、そうでないのか、ちよつと興味あるんだ」

「蘇東坡そとうぼがどのような生涯を送ったのか、一応のところは知っていますけど、トバー君の話はそれとはいささか別物のようなのでおもしろく聞いています。『講師、見て来たような嘘を言い』というのがありますが、トバー君の語りは、

『見て来た嘘』ということですよね」

* * *

——えーと、この間は、パワハラ知事さんから、金の作り方を教えるとか、記念の文章を書けとかいわれて、どうしようっていうところまでだったけど、それでどうなった？ 本で調べたり、ネットで検索したり、叔父さんに聞いたりすればたぶんわかるんだろうけど、せつかくだからトバー君から直接聞こうと、今日まで2カ月間すなおに待ってたんだ。

結果のパターンとしては、教えた・教えない、書いた・書かない、それぞれの組み合わせで4通りの可能性があるわけだけど、ボクの子想としては、(A)要求を二つともきいたけど、金は作れないし、文章は気に入らないしで、パワハラ知

事さんは激怒し、関係がさらに悪化したというのがフツーにありそうなんだけど、それだと意外性がなくてつまらないよね。だから、4通りのほかに、(E)作り方を教えたら、大失敗してパワハラ知事さんはお亡くなりになり、高台は完成しなかった、パワハラの報いでごさいます、ご秋傷さままつていうのはどうかかって思ってた。化学実験つて危険だつたりするじゃん。それとも、(F)トバー君は急に都に呼ばれ、そもそも話がふつとんでしまった、というのは？ もしかしたら、(A)の逆バージョンで、金はできるは、文章は気に入るはで、パワハラ知事はご機嫌まことにうるわしくつていうのもあつたりするかな。

㊦ 答えは(A)で、ただし、少し異なるバージョンでした。どのような文章だったのか、まずは聞いていただきましょうか。鵠かを射た男かに言われた通り、思

うところをそのまま書きました。

ほうしやう しゅうなんざん

ここ鳳翔は終南山の麓に位置し、起居、飲食、常に山と接していられる。鳳翔の四方に終南山より高い山はなく、終南山の近くに鳳翔よりも立派な都市はない。互いに近くにあつて、互いに最高であることを求めるならば、必ず終南山と鳳翔ということになる。

知事陳公は鳳翔に住まうようになってから、終南山がすぐそこにあるのを知らずにいた。山があるのを知らなくても政務にさしさわりがあるわけではない。とはいえ、ものの道理として終南山を知らないというのはありえない。そもそもが理に反していることから始まってここに高台が築かれることになった。

あるとき陳公はたまたまこのあたりを歩いて、林の木々の上に山があるのを見た。

自分が歩くとともに山が林の上を移ろうのを見て、塀の向こうを道行く人の頭が移ろうのと似ていると感じた。

「特に優れた眺望がここに得られそうだ」

陳公はそう思うと、ここの前面を掘って四角い池とし、その土を盛って、家屋の軒より上に出る高さにせよと人々に指示した。こうして高台を作れば、そこを登る者は、自分が高みへと上がって行くとはあまり意識しないで、終南山が自ら高々と飛び出して来ることに驚くであろうと、陳公は考えた。

「山が中空に突き出る、つまり虚空を凌ぐ、しの凌虚りょうきょという名がよろしかろう」

陳公はそのように高台の名を定め、完成した暁には記念となる文章を書くよう私そしよく蘇軾に求めた。

そこで私は次のように申し上げた。

「物があるいはすた廃れ、あるいは興り、あるいは成り、あるいはこぼ毀たれるのは必ずしも人の意のままにはなりません。それでも、とどのつまりだけは知ることができます。昔ここが荒れた野であり、わびしい田であり、露や霜に繰り返し覆われ、狐や狸がすみかとしていたときに、いずれ凌虚台が築かれると誰が予想できたでしょうか。あるいは廃れ、あるいは興り、あるいは成り、あるいは毀たれるという連鎖は無窮に続き、凌虚台が後にまた荒れた野ないしはわびしい田になるということは知らずにいようとすることもできません。

凌虚台が完成しましたら、試しに一緒に高台に登ってみようではありませんか。望み見るのは、東にしん秦の穆王の祈年宮やぼくおう橐泉宮のあったところ、南に漢の武帝のちようや長楊宮やごう五柞宮のあったところ、北に隋のずい仁寿宮、唐のきゆうせい九成宮のあったところ、外観は美麗、堅固です。それらが最も盛んであったころには、その規模は宏大、

で動かぬありさまは凌虚台の百倍どころではなかったでありましょう。しかし、王朝の繰り返しを経たいま、せめてそのよすがを彷彿とさせるものを求めようとしても、割れた瓦、崩れた塼さえ存在していません。麦畑や茨いばらの荒野を載せる丘だけが 있습니다。この高台がこれから先にどのようなことになるのか、言うまでもありません。

この高台に託して、虚きょを凌いで長く久しくあろうとしてもできるものではありません。まさしく理に反しているからです。人間世界において得たり失ったりするものは、たちまち来てはたちまち往くだけのものではないのでしょうか。

世に誇るべきものを作って自己満足を得ようとするのは大きな過ちです。長く久しくあるとたのおに足るものがあるとしたら、この高台の存亡などとは関わりがないに違いありません」

私は陳公の前から退くと、そのままを文章に記した。

——えーと、いま聞かせてもらった文章の感想の前に、先回りして言っておくと、途中でナンタラ宮とかずらずら並べたものはいちいち説明してくれなくていいから。どうせ、有名な建造物なんだろうなってことくらいは推測がつくもの。眠気を誘うだけのメンドっちい解説をして、わざわざ興味をそぐ漢文の授業みたいなことをするのはアホだよ。

それで思い出したけど、最近、十田じゅうただか千田せんただか万田まんだだかしんないけど、偉い作家先生が「漢文の授業は廃止せよ」ってなことをどっかに書いたらしいんだ。ボクとその先生とはゼンゼン違うってことをここで宣言しておきたいな。漢文の授業を眠ってばかりいたボクがその先駆者のように思われたら大ハジじゃん！

トバー君に言い訳しようってことではなくて、ボクがいいかげんにくっちゃべったことも叔父さんはホームページにそのまま載せてしまうんで、これ以上ハジさらしになるのは勘弁ベンちゃんなんだ。ボクの発言は省いてほしいって言ったけど、叔父さんはきいてくれないんだよなあ。B型人間は自分勝手だから、ホントこまっちゃうよ。

おくと 億田先生がおっしゃるには、学校で漢文なんか教えるから、中国は偉大な国だと勘違いしてしまうんで、「対中政策の秘策」として漢文の授業を廃止せよって。でもさあ、漢文の授業にそんな勘違いをさせる効力は100パーないとボクは断言できるよ。眠っていたから、いい印象は完璧にゼロだったもの。それこそ永遠のゼロだよ。道德の授業とかもそうだけど、学校教育になんかすごい力があるみたいに、どうして考えるんだろうね。学校で教えることって、だいたいがうさん

くさいって思うのがフツーじゃん。ホントに大事なことは学校で教えないほうがいいんだよ。

そもそも基本的に漢文は国語の科目だよ。だから、国語を嫌いにさせないために漢文をやめようっていうのならまだわかるよ。日本が特別に偉大だって思わせるために、英語の授業とか世界史の授業とかも廃止せよって兆田先生ちようたがおっしゃってくれたら、受験勉強がずいぶんとラクになるんだけどなあ。

そんなもって、トバー君の文章の感想だけど、ジョン・クレアの「クロウランドの大修道院」っていう詩をボクは思い出したんだ。ひと晩に1回くらいはどんなことにつけてもいいからジョン・クレアに結び付けるっていうのが、とりあえずボクの役目としてあるかなみたいにも思ったりなんかしてるんで、ゼンゼン関係なさそうでも持ち出しちゃうんだけど。

面倒な解説はしないといういま樹立した原則に従って、クロウランドがどうい
う場所かという説明はしません。ホントいうとき、ボクは行ってみたんだ。卒論
を書くためには、やっぱジョン・クレアがどういう場所で生きていたかくらいは
見ておきたいと思ったんで。ボクってこだわりの人だから。

その詩の後半で、修道院のかたわらにある墓地のありさまをこんなふう^に詠ん
でるんだ。

目を凝らして装飾を施した石の残骸、墓石の様を見れば

刻まれていた浮き彫りは、なかば擦り^すきれている。

そして繁茂する雑草が、人間の遺骸をたらふく食して

ついには、これに見入る人の影法師さえ怖れを感じているふうな姿。

(森松健介訳、316ページ)

影法師が怖れを感じてるって、ちよつとおもしろいと思わない？ ジョン・クレア自身ではなくて影法師ってところがしゃれてるじゃん。墓石にしても高台にしても、何かしら生きて証を残そうとしても、歳月の力によってむなしく消し去られてしまうという怖れはだれもが抱くものなんだろうね。「雑草が人間の遺骸をたらふく食して」という表現も、ちよつとぞくつとしない？ 皮肉というか、グロテスクなユーモアというか……。

㊦ ここでジョン・クレアのその詩を持ち出したのは、私の文章よりもそちらの方が遥かにイメージ喚起力があるということをおっしゃりたいのでしょうか。その

通りだと思います。文章と詩では性格が異なるということもありますが、私の場合は詩でもイメージ喚起方に乏しいという欠点があるようです。とかく明の時代みんの人々は宋の時代のわれわれを低く評価する傾向があつたのですが、私の詩は形は詩であつても、その実は散文だと手厳しく批判されました。とかく理屈っぽいということですよ。

——— そうですね、そうかもね。ボクのために、わかりやすく、日本語のフツウの文章に、ちよつと説明的に訳してくれているってこともたぶんあるんだろうけど、やたらと理屈っぽいなあって感じることはある。いまの文章だと、「自己満足を得ようとするのは大きな過ち」とまであからさまに言われたら、余韻もなんにもないもの。「はいはい、その通りでござんす。恐れ入ってござりまする」となるしかない。

いよね。

㊦ それを言っちゃあおしまい……でしようか？

——そういうこと！ わかってんじゃん。理に反しているとか、ダメ押しまでしてるしね。そこまで言われて、パワハラ知事さんはカーツとなつて、ビリビリ破いちやった？ どつかの大臣が「文化芸員はガンだ。一掃しなければ」って言ったらしいけど、「屁理屈ばっかをこねる文章家は国家に無用だ。一掃しろ」ってんで、トバー君はお払い箱になっちゃった？

㊧ 凌虚台が完成した治平元じへい（1064）年の春、陳知事は、その高台の入口の方

人の見るところに、私のこの文章を一字も改めることなく石に刻んで立てました。

——ということは、この文章が気に入ったってこと？ 気に入らないけど、理屈としてはその通りだと認めないわけにはいかなかったってことかな？ 高台に登る人は、いつかここは茨の荒野になると断言しているのを読むんだよね。「だったら作らなければいいのに」って思うよね。終南山の存在に気付かないなんて理屈としてありえない、「あんたの目は節穴？」みたいに書いてるし、全体を通してかなりイヤミがきついよね。そんなのを認めたっていうのは、パワハラ知事さんは、案外と度量の大きな人だったってことなのかなあ？

① この文章を書いて陳知事に提出したのは、年が改まってすぐのところで、同時

に金の薬方も渡しました。陳知事は「そうか」とうなずいただけで、特に反応はなく、その後も何も言われませんでした。一方で、意外なことに、陳知事の態度が日に日に変わって行きました。控室で待たされるようなことはすっかりなくなり、私が作成した公文書はすぐに読んでくれ、施策に関して率直な意見交換もできるようになりました。これはどういふことかと驚きましたが、よくよく考えると、変わったのは私の方で、その変化を陳知事が認めてくれたのでした。

——どういふこと？ えーと、自分の使命とか、枝葉末節とか、手本は范仲淹はんちゆうえんとか、7歳のときに立ち戻るとか、この前の終わりのあたりでいろいろと言ってたけど、要するに仕事に向き合う姿勢が変わったってことかな？

ⓧ 覚悟を決めて仕事に臨んだと言えはいいでしょうか。地方官の任期はおおむね3年で、陳知事との関係がどうであれ、残された1年足らずの間に、悔いの残らぬようにしたいと思つたのです。

ところで、あなたの職場では、査定前の自己評価とがありますか。

——仕事の達成度とか姿勢とか、いろんな項目について自己採点して、今後の課題とか目標とかを文章で書くやつだよ。やってんけど、なんかくだらない気がするんだよなあ。だいたい、仕事がろくにできないやつっていうのは、その自覚がなくて、おれっちでできるもんとか思つてんから、できないままにいるんだよ。だから、自己評価が高いやつほど仕事ができないってことだよ。そういう普遍法則がわかっていて、会社が自己評価を課しているとしたら、心底イヤミだよ。

7段階評価で最高の7にマルしたのを見て、「こいつホントにサイテーなんだよなあ、クククツ」とか笑うんだよ。アホだよな。逆に普遍法則を知らずに、純粋に自己評価に意味あると思っていたら、サイコーのトンチキだよ。

そんなんで、ボクの叔父さんなんかは、すべての項目に対して一瞬でまん中の4にマルしてんだ。小心者のボクはそこまではできないんで、少しは5とか6とかもまぜたりしちゃうんだけど。いいハジさらしだよ。

そんなもって、トーパー君は、残り1年になって自己評価したってこと？

㊦ かく言う私も、仕事がろくにできない者に限って自己評価が高いという法則の例外ではなく、鳳翔に赴任してすぐに国の仕組みに内在する問題を指摘したり、囚人の減刑をすばやく行ったり、雨乞いを成功させたりと、立派な仕事を十

分にしたような気になっていました。しかし、鳳翔の民衆の暮らし向きをわずかもよくするようなことは実際には何もしていなかったのです。

私は鵠を射た男に指摘され、民衆の日々の暮らしにとっては、国家の大枠もさることながら、枝葉末節が肝要であることを認識し直し、その実態を知ろうと努めました。前の前の知事が不名誉な辞め方をしたことはお話したと思います。我欲に駆られて公権力を不当に行使するということは、宋の社会においても、残念ながらごく稀というわけではありませんでした。前の前の知事は特に悪質な例で、個人的な資質の問題であろうと私は捉えていました。当時の記録を調べてみると、あからさまな違法行為があったわけではなく、知事を頂点とするピラミッド構造のもとで、近ごろはやりの「忖度」そんたくが大いに幅をきかせ、国の仕組みに由来する矛盾と個別の枝葉末節の組み合わせによって、自営農家が無残にも破綻に追い込

まれて行ったのでした。わかりやすい例を挙げれば、手続きに一定以上の厳密さを求めるだけで、期日に間に合わなくさせることができ、お上の仕事を請け負った者は多額の弁済を余儀なくされてしまいます。官員や吏人には、悪事を働いたとの後ろめたさはなく、むしろ規則を正しく運用し、知事のためによく努めたとの自負さえありました。

こうした実態が見えてくれば、私のできることも出てきます。手続きを少し緩めるだけで、民衆は大きく助かります。個々の官員や吏人が何をしてきたかが把握できれば、誰に何をどのようにさせればいいのかということがよくわかってきます。そうしたことをもとに、民政の改善策を私が提案すると、陳知事はより実効性のある具体的な助言をして下さいました。冬の初めに飢饉の予防策を提案したときには、実施段階では関わることを許してもらえなかったですが、きめ細か

く進めて行くことの大切さを知るようになってからは、飢饉対策の仕事もやらせてもらえ、結果として、飢饉には至らずにすみしました。実は正直に言っていると、気候が正常化したのが最も大きかったのですが。

枝葉末節的な具体的な事例を一つ挙げますと、春の終わりに扶風の町でちよつとした事件がありました。西方の国からの使者が鳳翔を通って都に向かい、次の扶風で駅館に泊まったのですが、翌朝、鳳翔に急使が来て、使者の一団が暴動を起こし、駅館が焼かれ、近隣の住民が逃げ惑う騒ぎになっているというのです。西方で何かときな臭いことが続いていた時期ですから、これは国の一大事、軍隊を動員して暴動を鎮圧しなければならぬと、人々はいきり立ち、わあわあ言い合っていますと、陳知事は人々を招集し、

「軍を出すには及ぶまい。1人で十分だ。誰か行ってくれる者はおらぬか」

とりわけ勢いのいいことを言っていた者に限つてうつむいて何も言わないもので、誰も手を挙げる者がいないのを見て、私は進み出しました。

「そなたが行つてくれるか。で、どのように騒動を鎮めるつもりか」

「私が思いますに、騒動などもとより何も無いに違いありません。使者の一行は、我が国に入つてまだ日が浅く、こちらの習慣を知らぬだけなのであります。

行つてみればすぐにわかります」

「わしもそう思う。我が国における作法をよく教えてやってくれ。都に着いてからも役立つようにな」

急いで扶風に馬を走らせますと、思った通りで、一行は向こうの国の風習に従つて野外で酒宴を開き、少しばかり盛り上がり過ぎただけだったので。火を焚き、歌い、踊つて楽しんでいたのが、折悪しく火が建物に移つてしまつて、暴動

を起こしたと見られたのでした。私は通訳を介して、中国での酒宴のやり方を教え、話だけではどうも理解がしにくそうだったので、実際に酒宴を催して一つ一つ指導し、そのうちに次第に盛り上がって、では今度は私が異国の流儀を教わろうではないかと、何のことはない、やはり屋外に出て、火を焚き、歌い、踊るということになってしまいました。

ともあれ、まかり間違ったら軍隊が出動して大変なことになりかねなかったのですが、使者の一行は陳知事の寛大な対応に感謝してそのまま都に向かい、両国の良好な関係が保たれたのでした。

——なんかいまでも通じそうな話だね。留学生は問題を起すから、アパートを貸さないなんてことがあるけどさ、ちよつとした習慣の違いだけなんだよなあ。フ

ツーに教えれば、あつそうかですむことなんだと思うよ。日本人だってゴミ出とかよく間違えて、カラスに荒らされたりしてるじゃん。「日本人お断り！」ってすればいいのに、なんで外国人だと最初っからダメなのか意味わかんないよ。留学生に気持ちよく暮らしてもらったら、将来国の友好にどれだけ効果があるかわかんないよね。

㊦ 陳知事とは敢えて姿勢を異にしたところもあります。官員や吏人のそれぞれが何をして来たか詳細に見えるようになると、陳知事が杖じょうで打つなりして特に厳しくしたのも理由があるとわかり、また妻の人物評も概ね正しいと納得できました。それでも、陳知事に習って上から押さえつけることも、妻の評価の低い者とは交際を断つようなこともしませんで、いままで通りの関係が続け、その人にも

「ありのまま」の「善」があると信じて、それに向けて何らかの働きかけをして行こうとしました。

鳳翔での経験は、端的に言って、リーダーシップを学ぶものだったということになるでしょう。鳳翔の来るまで、私は弟と学ぶ日々を送り、リーダーシップの実地体験は皆無で、いきなり地方自治体の局長クラスの管理職に就いたのですから、うまくできるわけがなかったのです。

——リーダーシップの極意ってなんだろう？ ボクみたいな人間がリーダーになることはないと思うけど、一応聞いておこうかな。

① そうですね、簡単に言うと、「人の心を結ぶ」ということになるでしょうか。

信頼し合うということ。リーダーがメンバーを信頼し、メンバーがリーダーを信頼するという相互の信頼関係があつて、リーダーシップが成り立つのだと思います。

——ふーん、わかるけど、難しいね。

えーと、もしかしたら、パワハラ知事さんといろいろあつたのは、実はトーバー君をいっぱしのリーダーとして育てるための鬼の特訓だったってこと？ そういう美談なの？

だとしたら、トーバー君って、なんか意地悪だったりしない？ だって、これまで。パワハラだのクラッシャーだの、さんざんボクに言わせておいて、内心では「ホントはそうじゃないんだよなあ、えっへへ」みたいな思ってたんでしょ？

まあ、おもしろく聞かせるためのテクニクってこともあるだろうけどさ、前はとつてもいやなおっさんだと思わせておいて、今回は一転していい感じになっちゃったんだもんなあ、まいっっちゃうよ。

㊦ 特訓をする意図は、陳知事には恐らくなかったでしょう。我が父が危惧した

ように、国を誤らせた王衍おうえんに似るような者は、早くに潰しておくのが国家のためになると、まさしく。パワハラもしくはクラッシュヤーを行使したのだと思います。

前の知事のもとで甘やかされ、都に詩を書き送っていい評判を取り、そのくせ心身の不調を訴えて休んでばかりで、しかも好みの吏人たちに囲まれてちやほやされていたのでは、どうにもならないと思っただけです。

——だけど、トーバー君にはちゃんと骨つぽいところがあるってわかったんで、パワハラ知事も見直してくれたってことなのかな。思う通りに書けと言った、あの鵲を射た人の助言がよかったんだろうね。あの文章はカチンときたけど、ズケズケもの言う、全く媚びないヤツだって一目置いたってことなんだろうね。

でも、実はそうじゃなくて、もしかすると、例の金の作り方でガツポガツポともうかるようになったんで、トーバー君を急にかわいがるようになったっていうことだったりしない？ それならそれで結構おもしろいんだけど。

㊦ 夏の初めだったでしようか、ふとした折に、

「金のあの薬方はしかるべき者に渡したから、そなたは何も気に掛けなくてよろ

しう」

と、陳知事に言われました。

私としては、ほとんど忘れかけていたので、いまさら気に掛けなくてもいいと言われても、何のことかという気分でしたが、

「悪用されることさえなければ結構に存じます」

と、答えました。

「あの薬方があつても、実際に金が作れるのは、わしが知るところでは2人しかおるまいな。1人はそれを人界から消し去ろうとし、もう1人は世に役立てることが出来る。だったら、そのもう1人に渡した方がいいのではないだろうか。だから、そうしたままでだ」

「私は確かに薬方を埋めて人界から消し去ろうとしました。では、世に役立てることが出来るもう1人というのは誰なのでありましようか」

「気になるか。信用ならぬ者だったら取り戻そうとするかな。別に隠しはしない。そなたも知っている男だ」

というわけで、一体それは誰だったでしょうか。

——またクイズ？ 当てたら、なんかご馳走してくれる？ 問題にするってことは、すでに出てきた人だってことだよ。あやしいのはだれだろう？ 皇帝とかスーパースターに渡して、国家として管理するっていうのもあるかな。金がじゃんじゃん作れたら国としてはいいもんね。でも、金を作れるのは2人しかないってことだから、きつと個性的なだれかなんだろうなあ。虎をこわがらなかつた章惇しょうとんとかいう友だちがいたよね。貧乏な楊耆ようきとか、鵲を射た人とかもいたけど、意外なところでトバー君のお父さんってこともあるかな？ だって、パワハラ

知事さんとお父さんとは知り合いだったって言ってなかった？ よし、答えはトバー君のお父さん！ でも、ちよつとひねりすぎかな。

① 陳知事は、ついぞ見せたことのない満面の笑みとなり、

「そなたも2回ばかり会っておるぞ。わからんかなあ、わしの、ほら、末の息子だ」

そう言われても、陳知事の息子さんに会った覚えがなく、

「いつお会いしましたでしょうか。申し訳ありません、記憶がないのですが」

「であろうか。息子はごくごくおとなしい性質で、立ち振る舞いがすこぶる地味で、2回会ったくらいでは何の記憶にも残るまい。己の名を告げる勇氣さえないおどおどとした息子だ。やつがそなたの前でしたことといったら、せいぜいが天

に向かつて矢を射るくらい、あるいは朱家しゅかやら郭解かくかいやらを気取るくらいだ。親として情けないことに、末の息子にはつい甘くなり、好きなようにさせてしまっておるのだ」

——えつ、そうだったんだ。鵠を射たあの方が、パワハラ知事の息子？　へーえ、驚きだね。

① 私も驚きました。言われてみると、2人の顔付きには似たところがあつて、全く思いもなかった私がかつたのです。その名を陳慥ちんせうといいます。

——トバー君のほうは知らなくても、息子の方は、トバー君が自分の父親の

部下だということを知っていたのかな。もしかして、父親と打ち合せをした上で、トバー君の前に現れたり、アドバイスしたりしてたの？

㊦ 陳慥は私のことは知っていたようです。しかし、互いに向き合った瞬間から、地位や名によらない付き合いが始まったので、父親が知事であることは一切関係なく、陳慥が信条とするところに基づいて、アドバイスをしてくれていたのだと思います。

——えーと、馬正卿はせいけいは知ってたんだよね。だって、馬正卿が2人の出会いを作ったんじゃないかあったかなあ。

㊦ あくまでも1人の男と1人の男が友情を結ぶようにということで、馬正卿は何も言わずに見守っていてくれたのでした。陳知事の息子だと知っていたら、凌虚台の文章についてアドバイスを受けるといふこともなかったでしょう。

——陳慥っていう人は、父親が知事でも自分は任侠道に生きるというのはちよつとカツコよかったりするけど、でも、親のスネをかじって遊んでいるだけってことだったりしない？

㊦ 父親からは完全に独立して任侠道に生きる道をきぐっていたようです。陳慥の真の生き様は、20年ほど後になって見ることになるのですが、それはまたそのころの話としておきましょう。

——ずっと先の予告編かあ。いろんな伏線があるから、いちいち覚えていらんないなあ。だから、叔父さんにも言ったんだ。ホームページでトバー君のことを読んでいる人も、何がなんだかわからないところがあるだろうから、親切に注とか付けるといいかもねって。たぶん今回あたりから、このことは第〇回で触れていましたみたいな注が付くのかもね。

㊦ では、金の薬方と記念の文章が片付いたところで、ここからは、鳳翔にいた最後の年にあったことを思い出すままにいくつか語って行くことにしましょう。

年が改まってすぐに治平ちへいと改元へんげんされました。前の年の前半に皇帝が亡くなって、その後と同じ元号が続いていました。いまの日本では天皇が交替すると即座

に改元することになっていますが、昔の中国では、新しい皇帝が即位しても、前の皇帝への崇敬の念を表すという意味でもとの元号を使い続けるというのも珍しくはありませんでした。

年の初めは、まだやや重い気分が続いて、天候も思わしくありませんでした。都のあたりでも雨が少なく、弟からは暮れのうちに、家庭菜園に菜を植えても芽が出てこなくて困っているという詩が届いていました。その詩と同じ韻を用いて詩を作って送り返しました。

新たな春が来ると、

塩漬けの菜の蓄えは、甕かめがひっくり返しとになって、

すっかり尽きてしまった。

しかし、そのうち階きやくわいの下に、筍たけのこの芽が出てくることだろう。

麦畑のあたりを巡れば、野の草も芽を出しているだろうから、

それらをちよいと摘んで、

どこか僧坊などを訪れて、軽く茹でて食べてもいいだろう。

食べられるものはそこらにあるのだから、

菜園に雨の恵みがないと心配しなくていい。

問題は天候ではなく、

世の中と自分が合わないことだと言うのなら、

田舎に引っ込んで田畑を耕せばいい。

それこそ食べるに困りはしないだろう。

ともあれ、新たな春の恵みを、

菜園おいくに生来る菜の芽に見たいと言うことなら、

また一つ年を取って、頭に自ずと白いものが芽生えるのを見れば、

それでいいのではないのかい。

——ふーん。なんとなく重い気分がただよいつつも、白髪びやくの芽生えを見ればいいと、そんな冗談じやうたんが言えるくらいに、気分が上向あがりいてきたってことかな。

Ⓣ ここで僧坊そうぼうと言ったのは、前回、雪の朝に南溪なんせきを訪れたという詩がありましたけれど、そのあたりに小さな草堂そうどうでも建て、一つは我が心の修練しゆれんのために、一つは土地の人と交まじわるために、折々せつせつ過ごすことができたらと、ぼんやり思おもっていたからです。

実際に建てたのは夏のこと、9月にこんな詩を詠みました。

もくもくと山の頭に雲が湧き立つと、

ぱらぱらと水辺に雨が注ぎ始めた。

溜池の水が減って、蓮は枯れようかというこの時節、

町の人が帰って、虎が出て来ようかというこの時分。

人間の住むべきところが、

虎の住いになってしまっているのは困りものだが、

山を焼けば虎を追い出すことができると言われても、

この千本の竹の緑を愛するのでそういうこともできない。

——蓮が枯れるというのは、やっぱりまだ水が足りなかったのかな。

㊦ 飢饉は免れても、ふんだんに雨が降るといっわけではありませんでした。

小屋は竹林の中にあつて奥まった雰囲気があり、「へきせいどう避世堂」と名付けました。人里から離れたあたりには時に虎が姿を見せるので、夜は外に出ないようと、村人に厳重に注意されました。

その避世堂で、年の終わりのころ、つまり任期が満ちるころに詠んだ詩があります。こうありたいものだという気分を詠んだということ聞いてください。

避世堂の名の割には、

世間を離れることのなお浅いのを残念に思い、

竹林のさらに奥へと分け入って見た。

自然を愛する者に虎を恐れる心はない。

世を避けようというのだからそもそも俗な心もない。

枯れたありさまは生気を失ったかのように、

無言のありさまは言語を失ったかのようにだ。

官服を脱ぎ、冠をはずし、帯をゆるめて安らえば、

鳥がともに思いを歌おうと誘いに来てくれて、

猿が夢から覚めよと起しに来てくれる。

避世堂に帰り、

夜になると、階のあたりに雪が積もり出した。

昔むかし、ある禅僧のところに、

緑色の毛を長く伸ばした仙人が訪ねに来たというけれど、

それはまさにこのようなきであつたらうかと、

じつと耳を澄ませて戸を叩く音を待った。

——トントントンと音がして、戸を開けたら、ワーツとトラが飛び込んできて、

食べられたりなんかしちやつたりして……そこに運よく獵師が通りかかつて、ト

ラのおなかをジョキジョキ切り裂いて助け出してもらい、代わりに石をおなかに

詰めて……。

ねえ、ホントにトラがいたの？

①

実際に避世堂で出会うことはありませんでしたが、天候の不順もあつて、人

里近くにまで現れるようになっていたのでしよう。

虎と言えば、ガラガツチャーンと、鳴り物を投げつけて虎を追っ払った章惇がしょうとんいました（指）第7回。その章惇が、1月に、公務を帯びて鳳翔に來まして、再び意気投合し、帰りがけに終南山のあたりを見て回るといっているので、雨乞いのためにたびたびそこを訪れて土地勘のあった私が案内役として同行することになり、4日間ばかりあちこちを巡り歩きました。

2日目だったか3日目だったか、仙游潭せんゆうたんという、深い絶壁に囲まれた底深くに、神秘的な色合いの水をたたえた淵を訪れました。崖の上からのぞき込むと、ぐいと足を引つ張り込まれるような感覚に、思わず後ずさりしました。

それを見た章惇に笑われ、

「ここから降りて、君と僕が來た証を下の岩壁に残そうと思うのだけど、その様

子だと、君はとてもじゃないけどついて来られないだろうな」

「いや、君が行くのなら僕だって」

と、言ったものの、足はみごとにすくんでしまっていました。

——トーパー君って、高所恐怖症の気があたりする？ 「ブラトーパー」なん

て番組を作ったら、仙人のくせに高いところが苦手っていうのが、案外と受けた
りなんかして。

㊦ 章惇は、

「あそこに丸太が渡してあるだろう。あれで向こう側に移れば、崖に縄が下がっ
ているから、するする降りられる。実にわけもない」

言い終わらないうちに、早くも身を翻し、木の根を掴んで崖を降りて行きました。かつては山中を自在に駆け巡っていた私ですから、これしきのこと恐れるものではないと、気を持ち直して後を追って行こうとしたとき、ふと馬正卿の視線を感じました。馬正卿は少し離れたところで馬とともに立っていたのですが、「行ってはならぬ」と、声には出さずとも、はつきりと顔に見えていました。かつての虎のときを思い起こし、ここでも思いとどまることにしました。

章惇はたちまち淵のほとりに降り立ち、筆を執って岩壁に「蘇軾、章惇来たる、某年某月某日」と黒々と大書しました。いまならいたずら書きで自然を損ねたとなんことをしたものです。「これを見ろ」とばかりに岩壁をたたくと、章惇はあつという間に崖をよじ上り、ふたたび丸太を渡って戻って来まして、息を乱すことも

なく、すたすたと仙游潭を後に歩き出しました。

私はそれ追ってその背をぽんと叩き、

「君という人は、いつか人を殺すこともできると、僕は思うな」

と、にやりと笑ってみせました。

章惇は一瞬無然とした顔をし、すぐに笑い、

「それはこういうことかな。自分の命をいともやすやすと制御できる者は、真の

意味で人の命を制することができるのだと」

「なんだ、簡単にわかってしまったか。君の意表を衝こうとしたらどうしたらいい

のだろう」

「それは難しいだろうな。君は僕以上に僕のことわかっている。僕もそうだ。

意表を衝くとしても初めから無理なのだ。分かり合い過ぎて、いまはこうしてい

でも、いつか最も厳しい敵と敵になるやも知れないな」

——なんか不気味な会話だね。ホントにそんなことを言い合ったの？ ちよつとあやしくない？

① この短い旅から帰ってから、見て来たことを11篇の詩にまとめて弟に送りました。その中から二つだけ聞いていただきましょう。

平原を流れる川筋をさかのぼって、

それが幻のように消える先に、

斜めに横たわる緑の山裾があった。

行き行けば、山また山となって、

そのまた遥かな奥に、

くつきりと一つの塔がそびえていた。

足に任せて尋ね入り、

塔の上に立って、風に臨んだ。

顧みると、海のように原や田がどこまでも広がり、

驚くことに、その全てが東に向かって傾いているのだった。

——なんだあ、高い塔に平気で登ってるじゃん。高所恐怖症なんかじゃないよね。

やつぱ、さっきのは作り話っぽいかも。

よく、「バカは高いところに登る」っていうけど、あれって、愚か者はおだてに

のりやすいって意味なんだってね。最近知ったんだ。ボクはさあ、ホントに高いところに登りたがる、そのまんまの意味かと思っていた。だって、人間ってさあ、高いところにフツーに登りたがるよね。

ずいぶん前んだけど、鎌倉の英勝寺えいしょうじのあたりを歩いていたら、高校生くらいだったのかなあ、屋根の上に男の子がごろんと寝そべっていたんだ。空を見てんだか、横を走る電車を見てんだか、昼寝してんだかかなんだかわかんないけど、大の字になってたんだ。見つけたとき、ちよつとギョツとしたけど、すぐに、なんかうらやましいって気がした。だって、そういうのってちよつとやってみたくない？

① 私も人後に落ちない馬鹿の1人として、高い塔があるとどこでも登りたがり、

このとき登ったのは大秦寺だいしんじという景教けいきょうの寺院の塔でした。景教は聞いたことがありますか。ネストリウス派のキリスト教です。

景教は唐の初めのころに中国に伝わり、その150年ほど後に皇室の保護を受けて景教の大本山である長安大秦寺が建てられたほか、各地にいくつもの大秦寺が作られ、相当の流行を見ました。このとき私が訪れたのは盤屋ちやうしやにあった大秦寺です。大秦とは東ローマ帝国のことで、ネストリウス派のキリスト教は東ローマ帝国に由来するからです。景教は、唐の武宗のときに仏教とともに弾圧されて一時の勢いを失い、宋、元の間はなお細々と伝わっていましたが、いつしか中国では消滅してしまいました。

——トバー君は、その大秦寺でキリスト教についてなんか聞いたの？



天竺てんじくよりもさらに西から伝わり、神の子イエスによって救済されるといふこ

とを聞いたくらいで、特に関心を抱くことはありませんでした。やはり我が中国の文化が最も優れているとの思い込みがあつて、夷狄の宗教などと見下していたのかもしれない。もつとも、仏教ももとは外来の宗教ではあるのですが、すでにすっかり中国化していて、外国に由来するとの意識はなくなっていました。その点で、日本から唐に留学した空海くわかいなどは外の文化を取り込むことに貪欲で、景教についても学んで、日本に持ち帰ったらしく、後に日本で阿弥陀あみだ信仰が大流行する淵源になったとの説もあります。

——そうなの？ キリスト教の日本への影響がそんな古くからあつたの？

㊦ まわりまわってそういうこともあったかも知れないという話です。南無阿弥陀と唱えると阿弥陀様が救ってくださいさるといふのは、神の子イエスによる救済と似ているところがあります。景教の直接的な影響がどれほどあったかはわかりませんが、大事なものは、いろいろなものが刺激し合うことで文化の多様な発展が促されるということですよ。

あなたがいまの日本に生きていることをときにくらやましく思うことがあります。キリスト教について知ろうと思ったら、聖書でも何でも、日本語ですぐに読むことができます。私の時代にはそのようなことはできず、ソクラテスやプラトンのようなギリシアの哲人はその存在さえ知ることがありませんでした。

私はせっかく大秦寺に来て、遠い世界の文化に触れ得るチャンスがあったにも

かかわらず、空海ほどの探究心がなくて、中国的世界の内側に留まったままでした。中国大陆においては、黄河も長江も大川は西から東に流れ、大地は東に傾いているとの古くからの地理観があり、大秦寺の塔において、私はまさにこのことを再確認したというのがいまの詩です。西方の文化を見ないで、東を顧みたとというのが、当時の私の限界を象徴しているとは思いませんか。

——いまの日本には、日本が一番みたいなことしか言わない千万奥田先生みたいな大作家がいるわけだから、大昔のトーパー君はしょうがないんじゃないの。

㊦ 仙遊潭の近くに南寺なんじと北寺ほくじがあり、南寺には塔があると聞いて、章惇ともどもそこも登ってやろうと目指しました。念の入った馬鹿であります。

しかし、山中の道は思うようにははかどらず、日が暮れかけて、ここも虎の恐れがあると脅かされ、まだしも近くあるという北寺で泊めてもらうことにしました。

唐の初めからこの北寺はあったと聞く。

唐の終わりの世の乱れを経て、

寺はさびれ、当時の石碑すら残っていない。

どこも虎を恐れて早々と門を閉ざし、

近くに村はなく、米を得ることもできない。

山の泉で甕を満たすことならできても、

野の草で腹を満たすことはできない。

ここはまことに美しいところだが、

長くここにいたためには、

飢えを忍ぶことを学ばなければならない。

詩としてはどうということもないのですが、「まことに美しいところだが」というところを少しだけ説明しておきたい気分になって、取り上げてみました。退屈な漢文の授業のようになりますが、たまには辛抱してください。

ここは漢字では2文字、「信美」で、普通に読めば「信まことに美びである」です。ところが、王粲おうさんの「登楼とうろうの賦ふ」という作品にこの「信美」が現れて以来、2文字だけで「信まことに美びであるけれども」と逆接で読む習慣が生まれました。王粲は三国志しよかつこうめいの諸葛孔明と同じ時代の人で、戦乱が続くなか、故郷からも、都からも離れた

長江の南の地に移り住み、樓閣に登って美しい風光を見て、

雖信美而非吾土兮（まことに美しいけれども我が土地ではない）

曾何足以少留（少しも留まるに足るところではない）

と詠みました。ここでは3文字の「雖信美」で、きちんと「いえど雖も」という文字が付いていました。この賦があまりに有名になったために、「信美」の2文字があれば、「いえど雖も」がなくても、「登樓の賦」を連想して、逆接として意味を取るということになったのです。

長い伝統を踏まえて作る詩にはこうした例がたくさんあるということを少しばかり知っておいていただきたいと思います。

——言葉って、いろんな人がいろんなふうに使って、意味が幾重にも重なっていかってことは、英語の詩でさんざん勉強したし、そういうのもおもしろいと思うよ。ジョン・クレアの例の「俺は生きている」だって、過去の用法を踏まえているから「I am!」をそのように訳すようになるんだけど、そのようなことって、やっぱりそのスジの人だから通じるおもしろさだよ。オタクじゃないとなかなかわかんないよね。

㊦ 章惇との旅を離れて、弟との詩の行き来をいくつか聞いていただきましょうか。弟は家庭菜園の菜が育たないとぼやいていましたが、父とともに都に住む家になちよつとした庭を造って、「南園」と呼んでいました。弟は「南園」にいろいろ

な木や草を植え、その一つ一つを主題にした11首の詩を作って送って来ました。その全てに和して返した第1首。

光り輝く帝王の都の大路を、

目にもまぶしい人々が行き来している。

そこで君は何をしているのかと問えば、

「門を閉ざして草や木を観ているのです」と答える。

微々たる草や木など観て何になるのか。

「物の変化を飽きることなく観ているのです」。

藤の品種けんぎゅうの牽牛たて、蓼の品種きりゅうの葵蓼きりゅうを育て、

君はそれを言葉に変換して摘み採り、

詩巻の中に納めた。

昔、謝安は引退後に自然の内に遊ぶのを好んだけれど、

しゃやあん

いつも妓女を連れ、酒を置いた。

そうしたものの力を借りなければ、

富貴を忘れ、心を慰めることができなかつたのだろう。

いまの君はそのようなことはなく、

富貴などは蔓がまつわりつくくらいにしか見ていない。

自分の内側に抱いている宝に満足しているから、

あえて高潔さを示すような植物を植えることもない。

私は早く君のもとに帰りたいたいと思っている。

年末まで待てないかどうか嘆かないでほしい。

私の方こそ早く願っているのだから。

——えーと、謝安というのは、パワハラ知事の控室で待たされたときに、見習って耐え忍ぼうとした人だよね（第8回）。あんときは手本にしようとして、今度はちよつとけなしているみたいだけど。

㊦ 謝安は大貴族でしたから、尊敬すべきところはありつつも、所詮我々とは違うということですよ。

ここで「高潔さを示すような植物」と言ったのは蘭らんのことです。いま普通にランというと、華やかな洋ランを思い浮かべると思ったので、あえて蘭とは言わずにおきました。中国では「四君子しきんし」と言って、梅、竹、菊、蘭の四種を君子の高

潔さを象徴する植物としていました。梅は寒さの中で他の植物に先駆けて花を咲かせ、竹は真直ぐに伸びて冬も葉を落さず、菊は秋の終わりの寒さの中で咲いて淡い香りをただよわせ、そして蘭は春に気品と香りを具えた花を咲かせます。春蘭のようなひそやかな蘭を思い浮かべてください。

植物の持つ文化的な意味合いはそれぞれの文化の伝統によって異なるということは、英詩を勉強されたあなたにはよくおわかりでしょう。

——ジョン・クレアの詩でボクがおもしろいと思うのは、古くからのいわれのあ
る植物をその象徴性に依拠して詠むよりも、ごくフツーに見られる植物をごくフ
ツーにそのまま詠んでいることかな。

五月がもうすぐ牧草地にやってくる。

キバナクリンソウの花はとても大きくなり、

リュウキンカや金色の花をつけるその種類すべては

川をまたぐ橋のそば、浅瀬の近くで群がり咲いている。

ヒナギク、キンポウゲ、ハナタネツケバナが

あちこち、あたり一面に輝くばかりに咲き、

(鈴木蓮二訳 21ページ)

いろいろ並べているけど、どれもフツの草なんだ。そして、少女たちが花を摘んだりしている様子を歌って、

すると手に棘が刺さり、痛くて持っていた花を投げ捨てる。

それから、その傷口に手当てをするためにオオバコの葉を探しに走る。

(鈴木蓮二訳 23ページ)

別にどうということもないん情景だよ。そういうのを切り取って詩に詠んだと
いうのがボクはちよつと好きだったりするんだ。

ⓧ それとは対比的なのが私と弟の詩で、その第2首。

私の官舎の庭は狭いものだが、

ろくに手入れをしないので、

草や木がいつの間にか林のようになってしまう。

春の雨がひとたびあまねく降り注ぐと、

美しいのも醜いのも我がもの顔に伸び上がる。

ぶどう

葡萄は自立できないから棚にしがみつこうとし、

さくろ

石榴は破れた赤い布のような花を咲かせ、

あわい

葵は美しい花をつけるが髪にさすには茎が短すぎ、

たて

蓼の赤は秋の終わりまで待たなければならぬ。

物はそれぞれ時節に感応して生きているのであって、

君はこのようなことから物の変化の本質を観て、

人間界の興廃も同じあると見ているのだろう。

草や木が勢いを得て盛んになるのは、

草や木の持つ能力によるのではなく、

草や木が枯れて散るのも、

やはり自分で自由にできることではないのであろう。

——やっぱ理屈っぽいなあ。庭の植物を見て、人間界の興廃まで考えなくてもいいのについていう気がするよ。

でも、トバー君にちよつとだけゴマすっておくと、枯れて散るのも自由ではないというのは、逆に勇気づけられるところがあるのかも。何でも自力、自己責任っていうのじゃなくて、他力ってことだよな。そういえば、キリスト教って他力なんだってね。南無阿弥陀仏っていうのも他力だから、さっきの話で通じているってことなのかもね。

㊦ 次は菊を詠んだ第10首。

秋の谷川に野菊が開いた。

菊の花の心を知るのは菊の花だけで、

ここには、

菊の花を見て、早くも一年が過ぎ行くと驚くような人間はいない。

かたわらに秘かに悲しむ蟋蟀こおろぎがいる。

谷川のほとりで開いた菊の花は、

谷川の汀に誰にも知られずに落ちる。

菊が枯れると蟋蟀は土に帰り、

「また来年に会おうと約束する。

昔むかしのある多感な人は、

秋の風に心を痛ませ、

夕べには悲しみのあまり落ちた菊の花を食べたと、

詩に詠んだけれど、

僕が思うに、

菊の花を拾い集めたところで、

朝飯前の腹の足しにもならないだろう。

——ちよつとお、なんなの。センチメンタルな詩かと思つてまじめに聞いてたのに、最後はどういうこと？ ナンチャツテ……という詩？ 菊の花を見て、いち

いち深刻ぶるなよおってこと？ そういえば、センチメンタルなんていう言葉は
いまはあんまし使わないかな。ちよつとキモいかもね。

㊦ 次は一連の詩の最後の第11首。

八月十一日の夜、

府学ふがくに泊り込んで君の詩に和しているうちに、

いつしか眠りに入ってしまった。

夢から覚めると、

目にはまだ山の緑がありありと残っていた。

心は白雲とともに飛び去り、

故郷の山の麓のあたりを巡り歩いてきたのだ。

君もまたどこかからかやって来て、

白い歯を輝かせてにっこりと笑い、

懐から新しい詩を取り出した。

その詩句は山の景観をしのぐすばらしさだった。

いま君の詩を思い出そうとして、

秋の菊を詠んだということ以外ぼんやりしてしまった。

昔、薪を採りに山に入った人が、

仙人が洞穴の中で奏でる琴の音を耳にし、

里に帰ってから、わずかに記憶に残るところを人に聞かせると、

人間界のあらゆる曲より優れていた。

君の詩もきつとそのようなものであろうから、

断片だけでもいいからどうか教えてほしい。

——夢で弟さんから聞いた詩を、それはこうだったと弟さんが教えてくれたらおもしろいけど。トバー君って、ホントに弟さんが好きだったんだね。そんな夢を見ちゃうんだから。

それはそうとして、泊まり込んだ府学っていうのはなに？

Ⓣ 都には馬正卿が学んでいた国立の太学たいがくがありましたが、鳳翔には府が運営す

る学校、府学がありました。かつて陳知事が若き日に官員になったばかりのときに、地域の文化水準を高めるために学校を建てたということを申し上げました

④

第7回、地域によつて様々な経緯で学校が作られ、行政のレベルで府学、州学、県学といろいろな種類の学校がありました。公立の学校のない地域もたくさんあつて、私は道教の寺院内にあつた私学で学んだのでした（**第3回**）。

地方の公立の学校で画期的だったのが、范仲淹が蘇州そしゅうに建てた学校でした。范仲淹はそれより10年ほど前に、応天府おうてんふの府学で教授を務めた経験があり、蘇州の学校で理想の教育を行いたいと、主任教授として胡瑗こえんを招きました。胡瑗の作成したカリキュラムがその後の多くの公立学校の手本となりました。

応天府の府学は古くからあり、范仲淹自身も学生としてそこで学びました。そのとき范仲淹は一日に一杯の粥しか食わず、眠くなると頭から水を浴び、まさに不眠不休、文字通り死にも狂いで勉強しました。范仲淹は母校の教壇に立つと、自分のような我武者羅な勉強ではなく、より効果的なやり方があるはずだと考え、

学生の自主性に任せるだけでなく、毎日学校に泊まり込んで、非常に熱心に学生の指導に当たりました。厳しくもまた懇切丁寧で、例えば科挙に必須の詩賦について、題を出して作らせる演習を繰り返し行って鍛え、同じ題で自分もあらかじめ詩賦を作ってみて、どこがポイントであるのかを細かく解説しました。

このときに范仲淹のもとで学んだ孫明復そんめいふくという人がいました。孫明復は大変貧乏で母を養うために物乞いの旅をしていて、范仲淹は憐れに思つて錢を与えたのですが、孫明復に人と異なるところがあると見て、アルバイトをしながら勉強したらどうかと、学校で雇うことにしました。孫明復は仕事も勉強も真面目に取り組み、范仲淹は折を見ては『春秋』しゅんじゅうを教えました。『春秋』は孔子が編集に関わつたとされる歴史書で、一見するとごく簡単な年表のようなものですが、一字一句のすべてに孔子の深い意図が込められているとして、それを読み説く学問、春

秋学というのが古くからありました。范仲淹は春秋学に深い造詣があり、それを孫明復に授けたのでした。後に、范仲淹が応天府を去ると、孫明復も府学から姿を消し、それから十年ほど経って、泰山たいざんのふもとに『春秋』を講義する大学者がいるという評判が立ち、朝廷が都に招いてみると、他ならぬ孫明復であったのでした。

もしも馬正卿が都の太学にいたときに、范仲淹のような人の指導を仰ぐことができたなら、太学を辞めることはなく、従って私のもとに来ることもなかったと思います。

私は鳳翔府の府学で時々教えるよう陳知事から指示され、「手本は范仲淹」を実践しようと、泊まり込んで学生を指導しました。しかし、どうもそのころの私は教師としては失格であったようです。

——へーえ、そう？ でも、なんとなくわかるかも。トバー君は超難関の試験をラクラク突破した「できすぎ君」だったから、できない人のことがわからなくて、うまく教えられなかったんじゃないのかなあ。そういうことだよね？

㊦ それぞれの学生の「ありのまま」を伸ばそうとの思いはあっても、学生の悩みを解決する実際的な手助けがあまりできませんでした。例えば、詩賦の演習で、私は模範解答を示して学生をうならせることはできても、どのようにしたら合格できるような答案が書けるのかというコツを伝授することができませんでした。口の中の虫を吐き出すだけだなどと言われたら、学生は困りますよね。

——あははは、そりゃあそうだ。でも、まさか、ホントにそう言ったわけじゃないよね。鈍才にとつて天才っていうのはまったくもって参考にもなんにもならないってことだよなあ。

㊦ それでも、学生たちは私の雑談は楽しんで聞いてくれました。特に歴史を語り出すと、あれからこれへと話が広がっていつまでも続くのを学生は飽きずに面白がってくれました。しかし、本当のところは、あなたが眠ってばかりいた漢文の授業のように、一つ一つ細かく解説をする方が、科挙を目指す学生にとってはいい授業であったのでしょう。私のもとから孫明復のような人が出るようなことはなく、門下生というものが生まれるまでには、私自身がさらに経験を積む必要がありました。

では、「南園」以外の詩で、弟の詩に和したものをもう少し聞いていただきましよう。

都のお偉いさんは、

繁華の地で羽振りよく振る舞うのに熱心で、

遠い国境で戦の太鼓が鳴ったりすることなど思ってもみない。

鄙びた武将が文学を論じるのが得意でないように、

雅な文人は弓を射るのは得意でない。

だけど僕は、

楊の細い枝先に百発百中で射当てても、

「いやいや、なんのこれしき、特段の腕前でもありませんなあ」

と笑ってみせ、

高い城壁に立って隼を射落としたら、

すぐさまひらりと馬にまたがり、

敵の馬群を蹴散らしてみせようと、

心の内でずっと考えているのだ。

しかし、君こそは長身であるのだから、

弓を学ぶのにもっともっとうってつけで、

かの関羽かんうだっけきつと追い抜くことになるだろう。

関羽は三国志のときに活躍した有名な武将で、弟にも関羽を目指して弓を習ってみてはどうかと勧めたのです。

——なんか勇ましいかも。トバー君は弓を射たり、馬に乗ったり、あのカササギを射た人に習っていたんだよね。パワハラ知事の息子だと知ってもそれが続いたの？

㊦ 陳慥との付き合い方は少しも変わりませんでした。野に出会えば、弓を習い、馬を習い、そして古今の成敗を論じ合いました。私は王衍になるまいと意識していたこともあって、結構熱心に武術に取り組んだのです。それは心身症から完全に脱却するのにもかなりよい効果があったように思います。

次の詩は、武よりも文の方、筆で文字を書く書しよがテーマです。よく琴棋書画と言われるように、書しよは、琴、囲碁、画とともに文人が必ずたしなむべきものの一

つとされていきました。

僕は書がうまいわけではない。

だけど、僕以上に書がわかっている者はいないのではないかと思ったりもする。書が何たるかがわかっていれば、もう学ばなくてもいい。

美しい人は顔をしかめても美しい、

美しい玉は歪んでいても美しい。

書もそうで、

端正な中に崩れたところがあっても、

剛健な中にあだっぽいところがあってもいい。

字の態勢は大らかであるのがよく、

筆の収まるところは細心であるべきだ。

そうは言ってもその通りにできるものではないから、字を書いても、端から捨てることになる。

ところが、僕の書がいいなどと、

手に入れようとしてくれる人がいたりするのは、

一体どういう勘違いなのだろうか。

君がくれた詩では僕の書をほめてくれていているけれど、

賛辞が過ぎて、僕の実力はそれに耐えるものではない。

このごろ僕は弓を学んでいて、

やはり力不足で、弓の強さに僕の腕は耐えられずにいる。

あれこれ好むものがたくさんあっても、

たような気がする。トバー君と会う前だったら、そんなもの完全にスルーだったけど、一応は目にとまるようになったんだ。でも、どうせ上野まで行くんだったら、科学博物館で始祖鳥を見る方がいいかもね。だってそっちの方がずっと古いじゃん。あつたりまえだけどさ。

㊦ 書についてあまり興味がないのかもしれないかもしれませんが、次回あたりでもう少しお話したいと思います。

あともう一つだけ弟の詩に和したものを聞いていただきましょう。これは、鳳翔での任期が終わろうというころのものです。

一別費三年（一別三年を費やす）

弟と別れてから3年という歳月が過ぎ去ったと詠んでいます。決して長くはない人生においてその3年間にどのような意味があったのだろうかという詩です。

人生というものは百年に満たない。

君と別れてからそのうちの三年を費やしてしまった。

その三年は僕等にとってどれほどのものだったのだろうか。

捨て去ったものは、もう帰ってくる道理がない。

僕がいつも恐れているのは、

別離の間にただ単に髪がますます白く、顔がますます衰えてしまうことだ。

かつて僕は喜んでものを書いたのだが、

君と別れからはるくなものが書けない。

書こうとしてものを考えると、

君との楽しさが思い出されて、

結局は憂いが湧き上がって来てしまうのだ。

たとえ天下の士人を自分に従えるようになったところで、

君と歓びを一つにした方がずっといい。

うらやましいのは、君が外には出ないで、

座り続ける敷物に虱が湧いても気付かないほどに、

書物に没頭していることだ。

男子たるもの出処進退はまことに重い。

三年の期が満ちる僕は、退かずに進むべきだと思っている。

折しも西方の国々は互いの恨みを解消して一つになろうとしている。

それは我が方に侵入して来るためではなからうかと、

勇猛果敢な士人は恐れている。

朝廷は戦を望んでいない。

しかし、敵はいつだって天を欺いて攻め込んで来るのだ。

ここの土地の人々は、

衣服を買うよりも戦いに使える馬を買い、

身を飾るよりも刀を飾ることを好む。

いつかここの人々を率いて、

敵との駆け引きをしたいものだと思っている。

——ん？　いまの詩、なんかヘンじゃない？　弟さんと別れ別れになった歳月が惜しまれると、前半はそんなことが主題だったのに、後半は急に勇ましくなって、別の詩みたいじゃん。

でも、前に、郭^{かくりん}綸とか言ったつけ、不遇な元兵士に向かって、次に戦場で活躍するときには必ず応援すると詠んだ詩があったよね（**第2回**）。若いときのトバー君は、カササギを射た人との出会いがなくても、基本的に血気さかんだってことなのかな。

㊦　心身症で伏せていたときには、故郷に帰りたいたと嘆くような軟弱な詩がたくさんありましたから、鳳翔での最後の年に至って自分は変化したということを意識して、敢えて特に武張った感じで詠んだということなのだろうと思います。

自分ことではあっても900年以上も経つと、細かい感覚までははっきりしませ
んの。

——いま日本では憲法9条をいじるような話が出てきているけど、戦争はないほ
うがいいに決まっています、あつてはならないものだよね。だけど、理不尽にも敵
が攻めてきたらどうするのか、戦うしかないだろうと、武張って言うつてことに
なんのかもしれない、トバー君のいまの詩はそういうことだよ。

でも、ボクは「理不尽にも敵が攻めてきたら」という前提がそもそもどうなん
だろうって思うんだ。そうはならないようにするのが、自分にとつても相手にと
つても絶対にトクなはずだよ。そんなときに抑止力とかいうのが出てきて、やや
っこしくなるんだけど、武力の存在を認める限りは本当の意味での平和にはなら

ないと思うんだ。力によってのみ平和は守れるみたいなことをいうアホがいるけど、アホだというのがもつとアホだ、夢のような理想主義だと笑われちゃうんだよなあ。

㊦ 私は大昔の人間なので、当時の考えがいまに通じるとは思っていません。唐王朝の後半から中国は長い分裂の時代に入り、泥沼の武力抗争を経て統一王朝としての宋が誕生し、再びの混乱が起こらないよう、文を武の上に置きました。それ以前の統一王朝である漢や唐は、その隆盛期には対外的に膨張政策を採りましたが、宋は逆に外から圧迫され、軍事力ではかなわないので、経済力によって、つまりカネの力で国境線を守りました。そのことはスーパースターの1人である富弼ふひつが戦争を未然に防いだというところでお話しました(第3回)。我が父も、

若いときの私も、カネに頼るのはあまりにも軟弱で、武をもって対抗できるようにならなければいけないと主張しました。

中国には、大昔に蚩尤しゅうという者がいて、戦争で使う五つの武器を發明し、それに強靱な金属を用いたという伝説があります。蚩尤のその發明から、もはや人は多数を殺傷する兵器を手放すことができなくなり、よって戦争もやめられなくなつてしまいました。宋が武の上に文を置いて、そうでない国が隣にあれば、座して侵入を許すわけにはいかないのです。

太古の中国には三皇五帝という8人の皇帝がいたときれます。8人が誰かということには諸説ありますが、『史記』によると三皇は伏羲ふつき、女媧じょか、神農しんのうで、五帝は黄帝こうてい、顓頊せんぎょく、嚳こく、そして何度もお話してきた堯ぎょう、舜しゆんです。三皇の最後の神農が死んだときに、蚩尤は自らが發明した武器を使って天下を奪い取ろうとしました。

それを阻んだのが黄帝で、涿鹿たくろくの野での激烈な戦いの末に蚩尤を破り、平和な社会を守ったのでした。涿鹿の戦いは、強い武力だけでは天下の主になることはな
いという象徴とされたわけですが、黄帝もまた武力を用いなければ勝てなかった
のです。ただし、皇帝と蚩尤の戦いは、実は漢民族と少数民族の抗争を反映した
伝説であるとの解釈もあります。

——蚩尤が少数民族側ってこと？　だとすると、民族の自立のために兵器を発明
して武力抗争に出たってこと？　となると、それには一理あるってことになった
りするのかなあ。見方が異なると、何が正しいのかわかんなくなるね。

それとさあ、「平和ボケ」とかって言葉があるよね。そもそも「ボケ」っていう
言葉はイメージ悪くて使われなくなっただんで、「平和ボケ」もフツーにはいわれな

くなったようだけど、ネット上だと「平和ボケしたアホな左翼」みたいなものしりがよく飛び交ってるよね。ボクなんか、トバー君から見たら「平和ボケ」そのものだったりするのかもしれないけど、トバー君だって、もつと前の乱世の人から見たら「平和ボケ」だったりすることもあるんじゃないのかなあって思ったりするんだけど、違うかなあ？

㊦ 我が父などは、「平和ボケ」に対して警鐘を鳴らすような言論活動をしたと言えるのかも知れませんが。私もそれに刺激され、清談にうつつを抜かして「平和ボケ」した王衍のようになってはならないと、弓術の稽古をしたようなわけです。しかし、実際に乱世を生きた人から見たら、そんなのは机上の空論、畳の上の水練と、笑われてしまうようなことなのでしょう。だからと言って、乱世を生き

人の言説こそが正しいということにはならないと思います。

——そうだね。人間の歴史ってさあ、たぶん置かれた時代背景のなかで懸命に生きて来た足跡ってことなんじゃないのかなあなんて思ったりするんだ。ボクがもしも日本の戦国時代とかに生まれていたら、それこそ戦ってばかりで、隣国にどう勝つかが最大の関心事で、国境にあるあの山城をどう落そうとか、この前の戦で殺された伯父さんの仇を討ってやろうとか、そんなことばっか考えなきゃならなかったんだろうけど、隣国たって、静岡県とか山梨県とかなんで、県境にあるちっぽけ城跡なんかいまじゃよっぽどのオタクじゃなければ見向きもしないよね。

さつき始祖鳥のことをちよっといったけど、現代は生物の大絶滅時代とかいわ

れて、地球の環境がどうなるのか、人類はこの地球を壊さずに生きて行けるのかってというのが一番の大問題だと思っただ。そんなのに、いつまでも国レベルでの争いをしている場合じゃないよね。だから、人類はもういいかげんに重篤な「戦争ボケ」から脱却しなきゃだめなんだよ。「戦争ボケ」の頭でぼんやり考えるから、地球や人類の未来がちゃんと見えないんだと思うよ。やっぱり始祖鳥の化石を見て、なが〜い歴史を踏まえてよく考えないとね。

ⓧ 昔の私はせいぜい三皇五帝にさかのぼるしかできず、視野もおおむね中国の内側に閉ざされていました。先ほど、酒宴で少々はめをはずして騒ぎになった外国使節のことをお話ししました。あのとときに一行と楽しく交流できたことが、後になつてじわじわ効いて、あなたのおっしゃる「戦争ボケ」から少しは抜け出せる

ようになったのではないかと思います。

それは後の話として、今夜もそろそろいい時間になって来たのではないでしようか。あと二、三の話題を並べてシメに向かうとしましょうか。

——じゃあ、なんかテキストに注文しとくね。しゃべってばっかで、あんまり食べてないんじゃないの？ 今夜もねずみ男のラーメンを、性懲りもなく食べる気なら、その分は空けとく必要があるけどさ。

㊦ 書の次には画を話題としましょう。鳳翔八観の詩で、唐の時代の画の名手として呉道玄ごどうげんがいたと申し上げました(第6回)。たびたび訪れていた開元寺かいげんじには、幅9間の壁に、釈迦の誕生から亡くなった後までを描いた大きな壁画がありました。

た。その中で、釈迦がまさに亡くなった場面を描いたところを詩に詠んで弟に送ったものがありますので、その一部分を聞いていただきましょう。

釈迦が仏道を修めて後に入滅すると、

あらゆる世界から皆が集まり来て、

天も人も悲しんだ。

鳥の哀れな鳴き声に、林も泣いてもだえ、

獣の哀れな足摺りに、泉も熱い涙をほとばしらせた。

このとき、釈迦が亡くなった褥しとねのまわりを、

穏やかな心で巡り歩いたのは誰であつたらうか。

太い眉、奥深い目の羅漢らかんであつた。

私は開元寺を訪れ、

香の煙に向こうに、

この場面を描いた古い画を見た。

釈迦が亡くなって、月は輝きを失った。

しかし、この画にはなお光が残った。

画師の姓名は書かれていない。

縦横な筆使いは名のある画師を軽くしのぎ、

巨大な鰐が小魚どもを呑む勢いがある、

人々は呉道玄の作であると言っている。

その壁画に署名や落款はなく、尋常ではない筆力に、呉道玄が描いたと考えら

れていました。私も呉道玄作に間違いないと信じ、何度も見に行きました。

ある日のこと、壁画を見て開元寺の門から外に出ますと、商人風の男が待ち構えていて、

「失礼ながら、あなた様に内々にご覧いただきたいものがございまして、まことに恐れ入りますが、この少し先までご同道願えませんか？」

このように言うと、似たような話が前にもあったと思いませんか。

——金きんの作り方を教わったってというのがそっくりだったかも。今度はなにがあった？ またあやしげな話？ ナントカ詐欺にひっかかりそうになった？

① 見せたものがあると言うのなら、見るだけは見ようと、その男の案内に従い

ますと、丘の道をしばらくたどって、かなり古びた小さな僧舎に連れて行かれました。男が傾いた門を叩くと、腰の曲がった老僧が出て来て、内へと導かれ、

「あなたさまは大層お目が高いと伺い、是非とも思っております。今日はついに念願が叶い、これより嬉しいことはございません。ようこそお越し下さいました。心よりお礼申し上げます」

へこへこことお辞儀をし、並みの俗人よりも愛想のよいありさまに、どうもあやしいと感じ、見ると馬正卿がひどく渋い顔をしているので、これはやはり気を付けないといけないと思いました。

老僧はあたふたと茶の支度をするなどしてから、商人を連れて奥に行き、2人がかりで布にくるんだ大きなものをいかにも重そうに運んで来ました。老僧がよろよろといかにも危なそうな様子に、馬正卿が手を貸し、部屋の中央に据えて、

「あなたさまはこれを何とご覧になりましたか」

老僧は布を取り除き、商人が馬正卿の手を借りて、4枚のぶ厚い板を順に取り出して私の前に並べました。板は黒く焦げ、2枚にはところどころに穴が穿たれ、多数の傷が付いていました。それらをおもむろに裏返して行きますと、窓からの淡い光のもと、私の目に飛び込んで来ましたのは、彩色されたみごとな画で、私のはつと息を呑み、前のめりになって見入りました。筆の痕の力強さは、先ほどまで見ていた壁画とそっくりで、

「これが呉道玄の画でなければ、一体誰が描いたのでしょうか」

老僧は膝を打ち、

「さすがおわかりでございますなあ。謂われを申せば、かつて長安の皇城内に、玄宗皇帝が建てた仏典を納めるための建物がございました。四方に門が設けられ、

左右に開く扉の表には菩薩像、裏には天王像を、呉道玄が描きました。唐の御代の終わりの乱れに、戦火はその建物にも及び、火の中から1人の僧がようようのことで4枚の扉だけを運び出したのがこれにございます。賊から逃れるため、2枚にかように穴を開け、縄を通して背に担い、都を脱出して、流れ流れてたどり着いたのがここでございます。裏側の天王像は火によって消されてしまいました。残った菩薩像をここでお守りし、以来百有余年、愚僧に至るまで大切に大切にいたしてまいりました。しかし、いまや僧舎はこのように荒れ放題となり、雨漏り、鼠の害が画に及ぶようなありさまで、しかるべき人を見つけてお譲りするのがよろしかろうと、あれこれ思案しまして、あなたさまにお越しいただいたのでございます」

呉道玄の画が我が手に入りそうな話の流れで、胸の高鳴りを覚え、ぐつと身を

乗り出しました。

——あはは、それって、もう完全にナントカ詐欺にひっかかる状況だよな。「ダンナあ、これはまたとない掘り出しものでっせ」とかいわれて、まるっきりのイカサマものをつかまされて、「何でも鑑定団」に見てもらったら、「何の価値もありません！」てなことになるんじゃないの？

① 馬正卿もそう思ったのでしよう、ぐいと私の袖を引き、退去を強く促しました。さすがにここは冷静になるべきと、「画を譲られるいわれはない」というようなことを述べて、ひとまず立ち去ることにしました。

しかし、気になって仕方なく、

「あれはどう見ても呉道玄だ。呉道玄でなければ、この丘を逆立ちで走ってみせてもいい。万一呉道玄の真筆でなくても、非常に価値のあるものだ。あれがもしも他の者の手に渡ったりでもしたら、後で大いに悔やまなければならぬ。どういふことで譲ってくれるのか、聞いて来てもらえないだろうか」

馬正卿にそのように言うと、

「全てを私に任せるとお約束いただけませんか。私がこれは駄目だと判断したら、若旦那様は二度とあの画のことはおっしゃらないようにしてください」

「わかった、わかった。画を見る目はそなたよりはあると思うが、人を見る目は及ばないであろうから、仕方あるまい」

私は一足先に官舎に帰り、馬正卿が戻るのをを待っていると、

「先に奥様と御相談させていたただきたく存じます」

と、すぐに奥に行こうとしたので、

「ということ、あれは本物とそなたも見て、しかし高いことをふっかけて来たので、妻と組んであきらめさせようというのだろうか。なら言っておくが、あの画は単に私がほしがっているのではない。父上に差し上げようと考えている。父上は都に来てから、友人から頂戴したり、御自分で購入されたり、たくさん画を手元に置くようになった。しかし、そのどの画よりもあの菩薩像は優れていると私は思う。間もなく3年の任期を終えて都に帰るので、そのときの土産としてあの画を父上にお持ちしたいのだ。つまり、これは親孝行である。親孝行とあれば、少々無理くらいはして少しも悪いことはないのではないかい」

馬正卿は苦笑いし、

「そのことも奥様に申し上げてみましょう」

——うまいこといっちゃって、親孝行なんて、急に思いついたただけだね、きっと。趣味のために無駄なお金を使ってしまうのを、奥さんに向かって苦しい言い訳をするっていうのは、昔から変わらないんだね。

㊦ 途中のやりとりは省きますと、10万銭で父へのプレゼントとして画を買い求めるといふことに、最後には妻も同意したのでした。

——10万銭ってどれくらいの価値なの？

㊧ いまのお金でいくらかという比較は難しいのですが、当時、小さな舟をチャ

ターして半日ほど乗ると、1000銭とか2000銭とかかりました。それをタクシー代と比較して、1000銭がほぼ1万円だとしますと、1000銭は10000万円ということになります。およその感覚としてはそんなところででしょうか。

——へーえ、1000万円かあ。いま県の局長クラスの人の月給がいくらなのか知らないけど、3年の任期で1000万円以上は稼げるよね。それを画につきこむといったら、奥さんはカンカンだろうね。いや、女性が局長だつていいので、旦那さんがカンカンってこともあるね。

㊦ 呉道玄の画が10万銭なら少しも高くはないというのが私の感覚で、鳳翔で

の任が満ちて都に帰ったときに、私の手元にはその4枚の板だけがあつて、あと

は何もありませんでした。世の中にはそこそこ裕福になって任地から帰るなどということもあったのですが、とんと稼ぎのない夫だと、妻もあきらめたのでしよう。

ついでに先のことまでお話しておく、私が持ち帰った4枚の菩薩像を父に見せると、父のもとには浄因寺じやういんの大覚璉師だいがくれんしから譲り受けた閻立本の国宝級の画もあつたのですが、**（第6回）**、

「我がコレクションにこれに及ぶものはいまだ一つもなかった」

と、いたく気に入ってくださいました。

やがて我が父は都で他界し、父が所蔵していた百余点の画はそれぞれに贈る相手を見つけて渡し、一番のお気に入りであつた菩薩像だけを父の棺とともに船に乗せて故郷の眉州に持ち帰りました。なけなしの10万銭を出したからというわ

けでもないのですが、私としても執心の品で、人に渡す気にはとてもなれなかったのです。

父を故郷の墓地に埋葬し、その後で、惟簡いかんという僧と話をしている、最も大切に絶対に手放すことのできないようなものを喜捨するのが最も功德があると、お釈迦様が言ったというのを聞き、私にとってそれは何かといたら間違いなく菩薩像なので、父の供養のためにそれを仏寺に寄贈しようと思いい立ちました。冷静になって考えれば、いくら大切な画でも、任地が変るたびに持つて行くというのは容易ではないので、いつまでも持ち続けられるものではないのです。

そこで、惟簡に次のように問い掛けました。

「人には、どうやら、物を集めて我が手元に置こうとする性癖があるらしく、手元に来るまでの間は手に入れられないことに苦しみ、手元に来てからはそれが失

われてしまうのではないかと恐れます。いま我が手元に4枚の菩薩像があります。もとは8枚あり、唐の皇帝はそれを守れず、4枚が賊のために焼かれてしまいました。広い天下を見渡して、物を蒐集してそれを3代にわたって守り通した例は稀で、衣食のために子孫が売ってしまうのがほとんどです。私ごときが菩薩像を守り続けられるはずがなく、貴僧に差し上げたいと思います。それでお伺いするのですが、貴僧はどのようにしてこの画を守ろうとされるのか、お聞かせ願えますでしょうか」

「愚僧も御仏にお仕えする身でありますから、菩薩像と聞くからには、我が命に代えてもお守りいたしましょう。たとえ目を抉られても、手足を切断されても、この画ばかりは奪われまいと、お守りするといふのではいかがでしょうか」

「それでは十分とは言えますまい。貴僧がいらっしゃる間はよろしかろうが、そ

の後はどうなさるおつもりでしょうか」

「ならば、死しての後にもお守りすると、御仏にお誓いしましょう。鬼となって画の近くにあつて守護し、取ろうとする者には必ず罰を与えるというのではありませんか」

「それでは十分とは言えますまい。仏を信じない者、鬼を恐れない者は、平然と盗み取りましょう」

「ならばと愚僧が次を申し上げると、貴公はきつとそれでは十分ではないとおっしゃいました。ならば、どうやって守ったらよろしいと、貴公はお考えなのでしょうか」

——ヘンな問答。お坊さんに寄付するのなら、その後でどうなろうとトバー君

が口出しすることではないと思うんだけどなあ。たぶん、お坊さんとあれこれ言い合うのを楽しんだってことなのかな。

だったら、ボクもどうやって画を守るか、なんか考えてみようかな。この前、うちの県の県民ホールに飾られていた棟方志功の版画が、実はカラーコピーだったっていう事件があったけど、そんなことがないようにするには、逆にレプリカだと偽って本物を置いておくっていうのはどうかな？ この前、佐渡の博物館から金塊が盗まれたんだけど、実はレプリカなので実害はほとんどなかったということだったけど、あれは本物のようなふりをして置いていたから、盗もうとしたヤツがいたんだよね。レプリカだと表示していたら、わざわざ盗ったりしないよ。で、トバー君のアイデアはどういうのだった？

㊦ 私はわざともつたいをつけ、

「実に簡単です。亡き父に代わって私が喜捨したと、菩薩像の脇に書いておけば、それでよろしいでしょう。なんとなれば、世に父親がなくて生まれた子はいません。父のためにしたと知りながら、悪事をなそうとする者がいるでしょうか。もしもいたら、その愚かさは唐を滅ぼした大悪人と少しも変わらず、盗み取ってしめしめと思ったところで、誰からも相手にされず、子々孫々に至るまで物笑いの的となりました。つまり、もとより取ってはならない物を貴僧にお渡しするのですから、あえて守る必要はないのであります。取られまいと知恵をしぼるのはそもそも無駄で、よって、貴僧のすべての答えに対して、十分とは言えますまいと評するしかないのです」

——なんかよくわかんないなあ。親孝行と聞いて、盗むのをためらったりするのは思えないもの。

㊦ 僧惟簡は100万銭の寄付を募って菩薩像を納めるための堂を建て、我が父が喜捨したことの証として、父の画を作って壁に掲げてくれました。ついでながら、私はその建設費の20分の1を寄付しました。

——つまり、もともと10万で買ったものにさらに5万を使ったってことだよな。さつきの計算だと500万円の追加出費ってことか。趣味にそこまでつぎこんじやうとは、ここは昔風に、若旦那の困った道楽といったほうがいいかもしれないね。

㊦ もう一つ画の話をしておきましょう。舞台はまたしても開元寺です。開元寺には王維おういの画もあり、「鳳翔八觀」の詩で、王維の描いた竹について次のように詠んでいました（**第6回**）。

ふた群れの竹があり、

雪から現れ出たかのような根や節と、

乱れ動く無数の葉が描かれていて、

その葉のすべてに葉の本質を見てとることができる。

この最後の行の原文は、

一一皆可尋其源いちいち（一一皆其の源を尋ねるべし）そ

で、竹の葉を竹の葉たらしめている源を尋ねて答えが得られるようだと言んだのです。竹の葉の形状が正確に描かれているというのではなく、竹の葉の本質が見る者に伝わって来るように描かれているということなのです。ならば、竹の葉の本質とは何かと、もしも王維に尋ねたなら、言葉では言い表せないから画に描いたのだという答えが返って来ることでしょう。

あるとき、王維のその画の前に立ち、竹の葉の一つ一つに細かく見入っていますと、ふと王維と竹とが言葉を交わし合っているような気がして、私は目を閉じ、その声を聞き取ろうとしました。

「そうやって先ほどからきよろきよろと視線を動かしているのは何のためであるのかな」

「万の葉の向こうに、一つの本質を見て取ることができるのではないかと思いまして」

「労ばかりが多く、得るものはまずあるまいな」

「ではどうしたらよろしいのでしょうか」

「ごくたやすい。そなたも普段やっているではないか」

「そう言われなくても、思い当ることがありません」

「焼くなり煮るなり、筍を食べたことがないとは、まさか言いはずまい。要はそれだけのことだ」

高らかな笑い声があまりにもはつきりと聞こえましたので、はつと目を開けま

すと、かたわらに一人の男が立っていました。年の頃は四十代の終わりくらいでしようか、にんまりと微笑みかけて来ましたので、

「箭を食べよとはどのような意味でしようか」

と、その人に問いました。

「王維は、まず腹の内に箭を置き、それから筆を手にし、この画を描いたのでありましょう」

「箭の内に全てが具わっているということでしょうか」

「その通りです。箭には一本の成長した竹、すなわち成竹せいちくが具わっています。葉の一枚一枚を細かに似せて描こうとしても、ただ単にそれらしき形になるだけです。心の内で箭を育て、成竹になったときに、造化の作用に任せて筆を動かすならば、必ずこの画のようになりましょう」

私はその説に感心し、誰なのだろうかと改めて風貌を窺い見ると、その後ろに私の知る人が立っているのに気付きました。王道矩おうどうくと言いまして、私の妻の兄です。

実は、王道矩が鳳翔に来ることは、別の人からの手紙で故郷を発ったということを知っていたので、もう現れてもいいはずなのだがと、ついその朝にも妻と話していたのでした。義兄は風変りな人で、ひよっとすると、気ままな旅路と送って、私が鳳翔を離れるまでに間に合わないのではないのかと心配もしていました。「すでに鳳翔にお着きだったのですか」

「お知らせしようとは思ったのですが、こちらのお方が、鳳翔に着いたなら、何はともあれ一番にこの画を見たいとおっしゃいます。君の『鳳翔八観』の詩と実際の画が異なっていたなら、君とは会わずに都に行き、もし詩と画が一致する

のなら君に会おうと、そういうことであつたのです。まさかちょうど君がここに
来ているとは思いませんでした」

私は義兄の顔を見た瞬間に、いままで聞いていた筈の話が疑わしくなり、未知
の人物がふつと消えてしまうのではないかと思ひました。というのも、義兄は、
頭の中は、たぶん空想が8割くらいを占め、現実はいせいで2割程度で、世の中
の珍談、奇談の類を記した書物を集めて読みまくり、行く先々で不思議な話を蒐
集し、それに自分の想像を加えて話をふくらませて人に聞かせるのが大好きとい
人で、まともな大人は義兄が話し出すと「またか」と顔をしかめてさつと逃げ去
るのが常だつたからです。

それで全てが義兄の作つた話のように思つたのですが、未知の人物は消えるこ
とはなく、その名を文同ぶんどうと言ひ、かねてから私も聞いていたれつきとした現実世

界の人物でした。文同は義兄の従兄弟に当たり、私にとっても遠い親戚筋ということになります。私より18歳年長で、科擧に合格して官員となり、一時的に仕事を離れて帰郷し、再び官職に就くために上京するに当たって、たまたま義兄と一緒にあって鳳翔に來たのでした。

義兄と仲良く旅するくらいですから、文同も風変りな人で、官員でありながら、頭の中の大半を画が占め、筍を腹の内に置くという境地を目指し、竹を描かせたら文同の右に出る者はいないと言われるまでに大成しました。いまに伝わる画もいくつもあり、興味があつたらネットで検索してみてください。

——類は友を呼ぶで、ヘンな人どうし、トバー君はその絵描きさんと仲良くないっただらうね。

㊦ その通りで、このときの出会いから長い付き合いとなりました。

——きよろきよろ万の葉を見るか腹の内に筈を置くかというのは、いわゆる帰納法か演繹法かってことだったりする？ トーバー君って、どちらかというと、直観重視の演繹法的発想が多かったりするのかもね、違うかな。

㊧ 義兄は、私が鳳翔にいる間にこのあたりを見物しておきたいということやって来たのですが、実は妻が呼んだのでした。そのことを知ったのは3年後で、何のためだったのかということとは、そのときにまたお話ししたいと思います。

——出た、得意の気をもたせ作戦！ ということは、今夜はそろそろこれで終わりつてことかな。夫婦間の秘密？ なんだらう、ちよつと気になるよね。

じゃあ、ここで最後に筍とか、注文すつかな。炭で焼くととくにうまいんだよなあ。おいしい筍食べてうまい画が描かけるようになるんだったら、一石二鳥だもんね。

㊦ 義兄の訪問は息子にとってかなり印象的だったようです。私は、文同の希望であちこちに所蔵されている名画を案内して歩いたり、私の希望で画の手ほどきを受けたりと、文同とばかり一緒にいましたので、義兄の方もっぱら妻や息子を相手にして過ごしていました。息子はこのとき8歳で、義兄が矢継ぎ早に話す奇妙な話が面白くてたまらなかつたのでしょう。後々までもよく記憶していて、

私に聞かせてくれたりもしました。

そういえば、息子のことはこれまでほとんど話をしていませんでしたが、それは正直に言って、息子のことは妻に任せっきりで、実のところ、話せるようなことがなかったからです。私の少年時代に、我が父は放浪の旅に出ている、母から教育を受けたということを上げたいと思いますが（ 第4回）、私は息子の近くにはいながらも、息子をほったらかしにしたという点では我が父と同だったのです。

——つまり、イクメンとかっていうのはまるつきり違う人だったってことだね。よくわかんないけど、昔むかしの父親っていうのはきつと權威があつたんだろうから、近くで偉そうにされたらうつとおしいだろうね。とくにトバー君は科挙

に優秀な成績で合格した人だから、「おれっちみたいになんなさい」なんてギヤーギヤー言われたらたまらないよなあ。

叔父さんから聞いたんだけど、昔の児童文学には、「ぶらぶらおじさん」っていうのがよく出てきてたんだって。社会的規範を教え込もうとするような父親とは別の立場の人がいてくれないと、話にふくらみが出ないってことなんだろうけど、昔は大家族だったから、父親の弟とかで、なんかしんないけどぶらぶらしている人が家において、それが子どもにとってはおちよつといい存在だったらしいんだ。世の中、なんとかなるみたいな感じできさ。

ボクなんかは、母ひとり、子ひとりだから、すぐに関係が煮詰まっちゃうんで、叔父さんっていう人がいてくれて、ずいぶんと助かってるんだ。この録音は叔父さんが聞くことになってんで、酔った勢いで声を大にして言っておこうつと。

そんなもって思うんだけど、「ぶらぶらおじさん」でも「ぶらぶらおばさん」でもいいけど、いまだと、たぶんそういうのは、引きこもりみたいなものだったりすんのかもね。それがたったひとりの子だったら、家族にとって深刻な問題になったりするんだろうけど、兄弟が大勢だとなんかなくなって、それなりにいい味を出せたりしたんだろうね。ボクも「ぶらぶらおじさん」の資格ならありそうだな。トバー君の義理にお兄さんも、息子さんにとっては「ぶらぶらおじさん」ぽかったりしたんだろうね。

㊦ たぶんそうだったのでしよう。では、私自身にとって「ぶらぶらおじさん」がいたのだろうかと振り返ってみると、1人とか2人ではなくて、大勢いたように思います。

——へーえ、そうなの？ えーと、科擧に合格した伯父さんのことは聞いたけど、

それは「ぶらぶらおじさん」とは対極的な人だよな。

ああ、そうか、たぶんわかったかも。少年時代に山で出会った隠者なんていうのは、100パー「ぶらぶらおじさん」じゃん。社会にうまく適応できないような人って、昔はそんなふうにして生きていたんだ。

① 道教の道士、あるいは仏教の僧侶と、私はたくさん付き合いましたが、それも一種の「ぶらぶらおじさん」と言っているのでしょうか。鵲を射た陳慥も「ぶらぶらおじさん」なのかも知れません。思ってみれば、そういう人がいなかったならば、私の人生は相当に味気ないものになっていたでしょう。

特に鳳翔での最初の官員生活は、陳慥がいなかったらかなり違ったものになり、その後の官界人生に重大な影響があったことでしょう。さらに言えば、馬正卿や妻が、横から斜めから後ろからいろいろに支えたり押ししたり引いたりしてくれたお蔭で、どうにかなったというのが、鳳翔での3年間の総括です。

3年の任期が満ちた12月の終わり、陳知事は私のために凌虚台で送別の宴を開いてくださいました。宴席を白けさせてしまうので有名な陳知事としては、自身が音頭を取って人々を集めるというのはなかなか異例のことでありました。

——パワハラ知事さんにとって好意的に解釈すると、大秀才のトバー君にはいろいろと手こずったけれど、官僚としてまあまあ一人前に育てることができたので、最後は気持ちよく送り出してやろうってことだったのかな。

㊦ とても一人前とは言えません。3年間の最後になって、官員としてのコツの
ようなものをようやく掴みかけただけです。

今夜の最後に、凌虚台での詩を聞いていただきましょう。

陳知事は気位高く、激しやすく、

何事も真直ぐでなければいけないので、

交際を求めて近づく者はまずいない。

知事も人と付き合うよりは、

この凌虚台に登り、

客人として山々を迎え入れ、

杯を挙げる方がよいと考えている。

青い山々は遠くにあっても、

知事が凌虚台からその顔をのぞかせると、

たちまちどたばたと駆けて来て、

他の誰にも見せないいい姿を惜しむことなく披露する。

今日は、ここに人々が集い、

礼儀作法などは忘れ、自由に振る舞ってよいとの、

知事の思し召しであるから、

大いに気分をよくして、高らかに歌声を上げたのだった。

そうこうするうちに、夕日がするすると落ちて、流れる雲にかかり、

淡い光を緑の壁に投げかけるようになった。

今年もここに暮れようとし、

綿入れの衣にも雪が降りかかるような寒さを覚えるまでになった。

知事は、ではこれまでと、人々とともに凌虚台下った。

私は山とともにしばし残っていると、

一人の客人が勇ましげに登って来た。

このとき、雁の群れが台の上のはるか高くにさしかかった。

客人はきらびやかな飾りの付いた弓を手にし、

ひょうと、天空に向かって矢を放った。

矢は雁とともに遠く天上の涯に落ちて行った。

客人はからからと笑い、

青い山々はその声に驚いて凌虚台から立ち去った。

——後からきた客人がだれだったのか、あててみせようか。矢を放ったというのだから、あのカササギを射た人だよね。

㊦ その通りです。陳慥は言いました。

「貴公は、あの雁のように、遙かな高みを飛ぶが故に、かえって狙われてしまうこともあるであろう。貴公のためには、ここで別れて、某とはもう二度と会わぬのを心より願っている。某が約束したことが果たされないのがよいのだから」
そのまますぐに台を下り、馬を走らせて行ってしまう。

——えーと、約束したことって、窮鳥懐に入ればってヤツだよね。その後、その

人に助けを求めるようなことはあったの？

㊦ 今夜のところは何も言わずにおきましょう。

——どうせ、そうくると思った。じゃあ、本当に今夜は終わりで、続きはまた2カ月くらい先ってことだね。いまのボクにとって、トバー君も「ぶらぶらおじさん」なのかも。900年前にはとつても偉い人だったんだろうけど、いまはピ―サンで。ペタペタそこらを歩いてるへんなおじさんだもの。

* * *

イノ君は私のことを「ぶらぶらおじさん」と言ってくれたが、残念ながらそれ

ほどの存在ではない。真正銘の金箔付きの「ぶらぶらおじさん」であろうとしたら、サローヤンの『我が名はアラム』に登場するギーコ叔父さんのようでなければならぬだろう。

ギーコ叔父さんはあるときヨガに目覚め、アラム少年は、瞑想によって自分はいかようにも変えられるというギーコ叔父さんの言葉を信じた。それで、誰よりも速く走る己の姿をイメージする訓練を積んで運動会に臨んだ。アラム少年はスタートを切り、イメージ通りに自分は運動会史上かつてない速さで走っていると思った。しかし、現実にはぶつちぎりの最下位だった。アラム少年の落胆をよそに、ギーコ叔父さんはいつの間にか瞑想をやめ、「昔通り、酒のみ、いつもぶらぶらして、女をおっかけている町の兄ちゃんあんの一人に返っていた」(三浦朱門訳)。

道教と親しいトバー君は、私などよりずっとギーコ叔父さんに近いから、確

かに「ぶらぶらおじさん」としての資格が十分にあるということだ。それこそフーテンの寅次郎は「ぶらぶらおじさん」そのものだ。